

- ・展示報告
- ・イベント報告
- ・その他報告
- ・学芸員コラム
- ・学芸茶話



与謝野晶子の「創作の場」

書齋は私達の巣である。

一番親しい所である。

晶子「紅梅の庭にて」より

晶子は生涯に歌を3万首以上作り、歌集や評論集を約40冊刊行しています。なかなか歌が詠めない辛い日もあれば、空想の世界に遊び込む話が生まれる楽しい日もありました。また、読書をはじめ、歌の添削や原稿の校正、短冊や色紙に歌を書く仕事もこなしました。晶子は書齋の机の上で、さまざまな表現を生み出していました。

晶子記念館には「創作の場」として「書齋」をイメージ展示しています。京都の鞍馬寺に移築された晶子の「冬柏亭」と呼ばれる書齋を参考に作りました。また、鞍馬寺で所蔵されている晶子の机も復元展示しています。この机の上で『新新訳源氏物語』の原稿を執筆したといわれています。

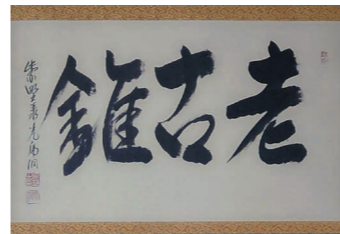
そして、机のそばには文箱を置いています。晶子の自伝『私の生ひ立ち』の「後記」で晶子の長男光が語った、晶子の机のそばには堺の両親の写真や手紙など、堺のものがまとめて大事にしまっており、「弱味を見せずに頑張り通した母にも、心の奥底には終始母を慕い、堺時代を偲ぶ心がある、母を慰め励ましてくれた」というエピソードがこの文箱で表されています。

また、晶子は子どもたちに囲まれながら仕事をしてきたことから、壁面に三男の隣との写真も飾っています。写真には、本棚にびっしりと本が並べられている様子が分かります。晶子が忙しい中でいかに読書をしていったかがわかります。

晶子は生涯、文筆活動を行い、夫の寛とともに書齋で長い時間を過ごしていました。晶子にとって書齋は「巣」であり、「親しい」「もともと落ち着ける場所」でした。

また、この「創作の場」では、晶子自筆の百首屏風（複製）も展示しています。実際の晶子の書齋には置かれていませんが、晶子の美しい文字を間近で観ていただけるよう露出展示をしています。

(森下)



聚光院小野澤馬洞墨蹟「老古錐」

老古錐

当館のさかい待庵の床には「老古錐」の軸が掛けられています。利晶の杜の開館時に、千利休の墓所がある京都大徳寺聚光院の小野澤馬洞住職に筆を執っていただいた墨跡です。

老古錐。聞き慣れないことばですが、その由来を訪ねてみましょう。老古は、古いの意。つまり、老古錐とは使い古して鋒が丸くなり、鋭利でなくなった錐です。

諸橋大漢和辞典は、「錐處囊中、錐囊中に居る」の解説で史記の平原君伝から、「夫賢士之處世也。譬若錐之處於囊中、其末立見」を引いています。史記は囊（世間）のなかにあっても、錐（優れた人）というものは、必ず外へその鋒（利発さ）が出るものであると突った錐を肯定的に捉えています。

では、禅と茶の湯の場合はどうでしょうか。利休の息子千道安が「利休」の意味を春屋宗園に問いました。応じた春屋の答えが、

参得宗門老古錐 宗門に参得せる老古錐
平生受用截流機 平生受用す、截流の機
全無伎倆白頭日 全く伎倆無し、白頭の日
飽対青山呼枕兒 青山に対するに飽いて枕兒を呼ぶ

でした。

これまで迎ってきた人生で得た鋭さや利発さを外に発散させることなく、世間の中で静かに存む。あたかも使い込んで先端が丸くなった錐。それこそが、我々が到達する境地である。利発さを休した境地。利休の精神そのものでしょう。

(矢内)

ご利用案内

- 休館日 ●千利休茶の湯館、与謝野晶子記念館、茶の湯体験施設 第3火曜日（祝日の場合は翌日）及び年末年始
●観光案内展示室 年末年始
- 駐車場 年中無休
- 開館時間 ●千利休茶の湯館、与謝野晶子記念館、観光案内展示室 午前9時～午後6時（最終入館 午後5時30分）
●茶の湯体験施設 午前10時～午後5時（最終入席 午後4時45分）
- 駐車場 24時間
- 普通車 1時間200円（1日最大1400円）※さかい利晶の杜施設利用者に割引があります。
●バス 1回1,000円【予約制】



交通アクセス

- 阪堺線 宿院駅より徒歩で1分
- 南海高野線 堺東駅よりバスで約6分（宿院バス停下車）
- 南海本線 堺駅より徒歩で約10分 バスで約3～5分（宿院バス停下車）
- JR阪和線/南海高野線 三国ヶ丘駅よりバスで約10分（宿院バス停下車）
- 阪神高速15号堺線 堺ICより車で約3分
- 阪神高速4号湾岸線 大浜ICより車で約3分

利用料金

区分	大人(大学生含む)	高校生	中学生以下
観光案内展示室	無料	無料	無料
千利休茶の湯館・与謝野晶子記念館※1 (2館ともご覧いただけます)	300円	200円	100円
立礼呈茶(抹茶と和菓子)	500円	400円	300円
茶室お点前体験【予約制】	500円	400円	300円
さかい待庵特別観覧セット【申込制】 (展示観覧・立礼呈茶含む)	1,000円	800円	500円

※1 常設展観覧料は障がいのある方と介護者、堺市内在学の小中学生と引率教職員、未就学児は無料

編集後記

今年度は与謝野晶子生誕140年及び明治150年にあたり、各記念事業にちなんで意欲的な企画展等に取り組んで参りましたが、いかがでしたか。来年度本施設は開館5周年を迎えます。少しでも多くの方々に、堺の文化やその魅力を伝えられるような展覧会等を随時企画していきたいと考えておりますので、ぜひ堺にお越しください。

(木村)

特別
陳列

〈千家十職—利晶で愛でる伝統の技と美—〉

平成30年6月1日(金)～7月1日(日)



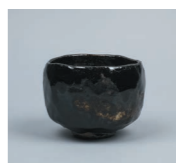
①



④



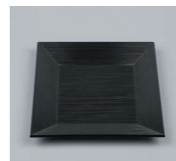
⑦



②



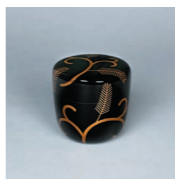
⑤



⑨



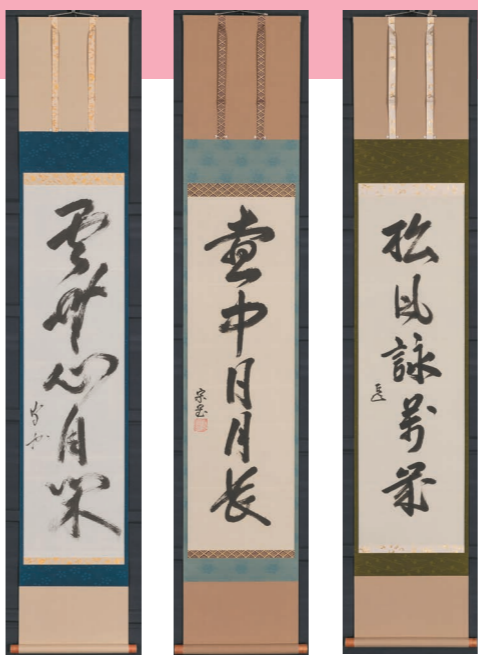
③



⑥



⑩



⑧-1

⑧-2

⑧-3

【寄贈作品一覧】

- ① 17代 永樂善五郎作「瑞雲二鶴水指」
- ② 15代 樂吉左衛門作「黒樂茶碗」
- ③ 16代 大西清右衛門作「尻張釜」
- ④ 16代 飛來一閑作「元伯好 縁高」
- ⑤ 13代 土田半四郎作「五色詞黎勒」
- ⑥ 13代 中村宗哲作「松唐草蒔絵大棗」
- ⑦ 14代 黒田正玄作「竹一重切花入」
- ⑧ 13代 奥村吉兵衛表具
 - 1 表千家14代家元 而妙斎筆
 - 2 裏千家16代家元 坐忘斎筆
 - 3 武者小路千家14代家元 不徹斎筆
- ⑨ 14代 駒澤利斎作「黒四方盆」
- ⑩ 11代 中川浄益作「利休写エフゴ建水」

昭和33年(1958)に発会した堺ライオンズクラブは、平成30年(2018)に設立60周年を迎えました。その記念事業として、堺でのさらなる茶の湯の発展のために、表千家、裏千家、武者小路千家の三千家各家元並びに千家十職の各職家のご協力を得て、さかい利晶の杜へ千家十職の茶道具をご寄贈いただきました。

本展では、それらの茶道具を、作り手である各職家のご当代より作品の解説や堺への思いなどをメッセージとして頂き、ご本人のお顔写真とともに展示しました。ご来館の皆様には、作り手自身の言葉を通して、作品の理解が深まり、親しみを持っていただくことができたと思います。また、本展にて初めて取り入れた展示手法ですが、「五色詞黎勒」(画像⑤)の中に入られた芳香を放つカリロクの実の香りを感じていただくために、特設の展示ケースに穴を開け、その穴に顔を寄せると香りを感じていただけるようにしました。はじめてのカリロクの香りに、どこか懐かしさを感じるというお声が多く寄せられました。さらに、茶道具の展示とともに、千家十職の紹介をはじめ、千利休を祖とする三千家と千家十職の関係性や、400年の歩みなども、パネルや年譜を使用し分かり易く紹介しました。

本展終了後は、この度ご寄贈いただいた茶道具を、千利休茶の湯館において通年で展示します。また、茶会などのイベントを通して広く一般の方々に千家十職の茶道具に触れていただく機会を設ける予定です。(餅原)

企画展 明治150年記念 〈茶の湯の復興—幕末・明治の千家茶道を中心に—〉



平成30年(2018)は、1868年の明治維新からちょうど150年にあたりました。

新しい時代の幕開けとともに、封建制度が廃止され、日本は新しい国家体制を構築し、欧化主義がまたたくまに社会に浸透し、伝統文化への人々の興味は薄れていきました。

このような時代のうねりの中で、千利休を祖とする表千家、裏千家、武者小路千家の三千家は、17世紀中期より大名家へ茶道役として仕官することで得ていた経済的基盤を失い、苦しい時代を迎えます。

本展では、幕末から明治にかけて大きく変化する時代の流れの中で、茶の湯の復興における三千家宗匠の功績を振り返りました。また、新たな活動の場を地方に広げた各宗匠の活躍を、地方ゆかりの茶道具を通して紹介しました。

最初のコーナーでは、幕末・明治に活躍された表千家11代碌々斎、裏千家11代玄々斎・12代又妙斎、武者小路千家11代一指斎の三千家宗匠が共に手を携え、伝統文化の継承者として茶の湯の復興に向け様々な努力を重ねた様子を、関連する出来事や茶道具を通して振り返りました。まず、茶の湯の復興に関連する主な出来事として、当時



平成30年9月14日(金)～10月21日(日)

(明治5年頃)三千家の長老であった玄々斎が、「茶道の源意」と題した建白書を京都府知事・長谷信篤宛に提出したことがあげられます。これは、明治という新しい時代を迎え、新政府から茶道が伝統文化として正しい理解を得られないことに対して、「茶道は忠孝五常(儒教の教え)に基づき成立・発展した精神文化である」という茶の精神の目指すところを述べたものです。その後、一指斎も玄々斎の内容をさらに広げた内容の「口上書」を京都府へ提出し、新しい時代における茶道の重要性を説きました。その他の出来事としては、現在も神社仏閣で執り行われる献茶式の始まりといわれる明治13年(1880)の碌々斎奉仕により始まった北野天満宮での献茶式や、天正15年10月1日に豊臣秀吉によって開催された「北野大茶湯」300年を記念し明治19年(1886)に北野天満宮において執り行われた献茶式と3日間の茶会などがあります。これらの様子は、本展のために特別に三千家よりお借りした当時の軸や茶道具の展示などを通して、ご紹介することができました。さらに、三千家宗匠の好みを結集して作られた「三友棚」は、素材を活かしたシンプルさと、精巧な装飾の美しさに、興味を示される方が多くいらっしゃいました。

次のコーナーでは、地方に活動の場を拡げた三千家宗匠の中でも、とりわけ東北から九州までの広範囲にわたり活動の場を拡げた碌々斎宗匠の

足跡を、地方ゆかりの素材で作られた茶道具を通してたどりました。宗匠による地方への活動の広がり盛んになっていったこの時代から、地方にゆかりのある茶道具が多くみられるようになったと言われています。ここではさらに、碌々斎の実弟でもある一指斎との交流を、兄弟ならではのエピソードを交え紹介しました。

最後のコーナーでは、三千家宗匠と堺ゆかりの茶道具を紹介しました。なかでも玄々斎作の「竹茶杓 堺八景」の8本の茶杓には、堺の八か所の景観(堺八景)にちなんだ銘が付けられており、田能村直入によって描かれた「茅海八勝図帖」の堺八景図とあわせてご覧いただきました。さらに現在の地図で位置確認などをしながら、幕末・明治の堺の情景に思いを馳せていただけたと思います。

本展では、幕末・明治という激動の時代における茶の湯の復興について、その兆しが見え始めた時代までを千家茶道を中心に紹介しました。現在の茶の湯は、日本の伝統文化として広く海外でも知られるようになりました。しかしながら、国内ではまだまだ敷居が高く、一部の人ががたしなみ、少し時代遅れの文化と思われているのではないのでしょうか。まさに明治維新の頃のような状況と大変よく似ているような気がします。この度は、茶の湯文化を見直す一助となればという願いを込めて本展を企画しましたが、如何でしたでしょうか。次回のご来館の際には、本展の感想とともに、今後期待する展覧会などについてのご意見をぜひともお聞かせ下さい。(餅原)

企画展

〈与謝野晶子と女性歌人―『みだれ髪』から『チョコレート語訳 みだれ髪』まで〉

平成30年4月27日(金)～5月27日(日)



堺を生誕の地とする偉大な近代歌人である与謝野晶子の生誕140年を記念し、晶子の歌人としての輝かしい業績をたどるとともに、晶子とゆかりの深い女性歌人の活躍を紹介することによって、明治・大正・昭和という時代における女性歌人の軌跡をたどる企画展を、与謝野晶子倶楽部と産経新聞社の協力で開催しました。また、書籍展示では、立命館大学図書館と与謝野晶子倶楽部会長の太田登氏の協力を得ました。展示は、次の三部構成でした。

【第1ステージ】 明治・大正・昭和に生き、歌う晶子の歌林：晶子の明治・大正・昭和の各時代を代表する歌を紹介するとともに歌集を展示し、晶子の近代歌人としての歩みをたどりました。紹介した歌は、「清水へ祇園をよぎる桜月夜(こよひ逢ふ人みなうつくしき)『みだれ髪』(明治34年)収録)、「ああ皐月仏蘭西の野は火の色す君も雛髻栗われも雛髻栗(『夏より秋へ』(大正3年)収録)など12首です。

【第2ステージ】 晶子とともに奏でる女性歌人たちの歌典：晶子とゆかりの深い同時代の女性歌人である山川登美子・茅野雅子・柳原白蓮・九条武子・三ヶ島霞子・原阿佐緒・岡本かの子・中原綾

子の代表的な歌を紹介するとともに第一歌集を展示し、女性歌人としての晶子の先駆的な意味をさぐりました。

【第3ステージ】 現代に響く女性歌人たちの歌心：現代に生き、歌う女性歌人である馬場あき子・尾崎左永子・河野裕子・道浦母都子・今野寿美・松平盟子・米川千嘉子・俵万智・永田紅の代表的な歌を紹介するとともに第一歌集もしくは最新の歌集および晶子に関する著作を展示し、晶子短歌の魅力がいまもなお現代の女性歌人たちに息づいていることを明らかにしました。

来場された方々にはアンケートの協力をいただきました。以下、いくつかを紹介させていただきます。

▼近代～現代まで幅広い詩人を取り扱っていた点がよかった(20代女性) ▼小さな部屋にパネルと初版本の展示でコンパクトに要点



を得た内容で非常にわかりやすかった(60代女性) ▼胸にグッとくる歌で今度読んでみようと思った(10代女性) ▼(パネルの歌の傍らに) 現代語訳がついているとより楽しめたかもしれません(40代女性) ▼女性歌人の歴史の流れを分かりやすく知ることができた(20代女性) (赤澤)

りを感じるだけでなく、その生き方が分かる数少ない資料となっています。なかでも「さかい利晶の杜」開館後初めて展示した晶子愛用の和洋筆筒は、西洋風なデザインでサイズも大きいため見ごたえがあり、展示にメリハリができました。

第4章 富村コレクション
晶子を敬愛し、顕彰活動を行った実業家、富村俊造氏から寄贈された貴重な資料群を紹介しました。なかでも、与謝野夫妻の弟子で満鉄総裁であった小日山直登旧蔵資料や希少価値の高い雑誌『冬柏』合本は、ほとんど研究されていない昭和期の晶子の活動を知る貴重なものです。富村氏が晶子研究の後進の育成のため「研究者の交流と学習に役立ててほしい」という願いをこめて寄贈されたこれらの資料は、研究資料としても幅広く活用できる貴重な資料群です。

以上のように、晶子生誕140年の記念展として、堺市博物館所蔵の晶子コレクションの特徴と意義を明らかにできたことで、今後さらに堺市が晶子顕彰・研究の拠点として認知され、資料が活用されることを期待したいと考えています。

また、企画展の内容をまとめた解説パンフレットを制作・刊行しました。与謝野晶子倶楽部会長の太田登氏にご寄稿を得るとともに、共同研究の成果を含めた充実した内容となっております。会期終了後もさかい利晶の杜にて販売しています。(森下)

企画展

〈利晶に探る 与謝野晶子コレクション〉平成30年11月2日(金)～12月16日(日)



堺市では、これまで晶子の親族や弟子などゆかりの人々が所蔵していた晶子の遺品や書をはじめ、さまざま資料を収集してきました。これらの資料は、堺市博物館・堺市文化課・堺市立中央図書館で所蔵、管理していましたが、平成27年(2015)に「さかい利晶の杜」開館を機に、堺市博物館で一括保管されることになりました。これらの資料を、平成30年度より、与謝野晶子倶楽部と共同で調査研究を行い、その成果を企画展で紹介しました。その結果、今まで以上に充実した内容となり、来館者の方々にも大変満足いただけました。

本展では、特に、晶子と関係の深い人々が所蔵していた貴重な資料を中心に展示し、その背景を紹介することで、堺市博物館が所蔵する与謝野晶子コレクションの意義を知っていただく機会となりました。

展示内容は、特徴的な資料群を4つに分けて構成しました。

第1章 晶子の堺時代資料

晶子の実家である鳳家の旧蔵資料や駿河屋関係資料をはじめ、晶子が堺時代に作品を掲載した文芸誌などを紹介しました。このうち、共同研究によって、駿河屋の帳簿内容が明らかになり、駿河屋で作っていた菓子名などが判明しました。また、

和歌山市立博物館より総本家駿河屋で使っていた干菓子の木型や絵手本を借用し展示したことで、堺駿河屋の当時の様子がより鮮明になりました。

第2章 川勝コレクション

与謝野夫妻の弟子で、高島屋の重役であった川勝堅一氏から寄贈された「川勝コレクション」35点は、所蔵資料の中で最も華やかで美しい資料群です。本展のポスターにも使用している「与謝野寛・晶子歌(色紙・短冊)貼交屏風」はすでに何度か展示公開していますが、「こんな美しい立派な屏風が堺市に所蔵されていたとは知らなかった」と感動される方々もいらっしゃいました。また、高島屋史料館からお借りした北野恒富画の美しい女性のポスターと、このポスターの中に金文字で印刷された晶子自筆の歌の掛軸とを併せて展示したところ、多くの方が足を留めてゆっくりご覧になっていました。

第3章 晶子旧蔵資料

与謝野家をはじめ、晶子と近い人々が所蔵していた資料は特別な意味を持ちます。特に末娘の森藤子氏が所蔵していた原稿類は、晶子最後の集大成『新新訳源氏物語』の草稿や、父である与謝野寛の草稿や愛用資料といった重要な資料群です。また、与謝野夫妻の弟子たちが受け継いだ愛用の品々は、晶子の温もりや与謝野家での暮らしぶ

企画展

「与謝野晶子の満蒙旅行」初公開書簡を中心に

平成31年2月20日(水)～3月24日(日)



平成30年は、与謝野晶子が夫の寛ととも旧満州と丙蒙古(中国)へ旅行に出かけて90年となります。

この旅行は、南満州鉄道株式会社(以下、満鉄)の招待によるもので、昭和3年(1928)5月5日から6月17日までの約1か月半に及びました。晶子はこの旅について「私は唯だ随意に歌を詠めばよいと云ふ条件のもとに招かれて行くのですから、全く有難い旅行をさせて頂くのです。この序に、私の殆ど知る所のない支那の自然と人事の一端にも触れて来たい」(座談より)『横浜貿易新報』1928年5月6日)と述べており、旅に期待を寄せている様子がうかがえます。そして帰国して2年後には、夫との共著で紀行詩歌文集『満蒙遊記』を刊行しました。



この旅行で与謝野夫妻の世話役を務めたのが満鉄社員の古

澤幸吉でした。幸吉が長女松江を文化学院に入学させたことと晶子に書面を送ったことから、家族ぐるみの交流が始まりました。

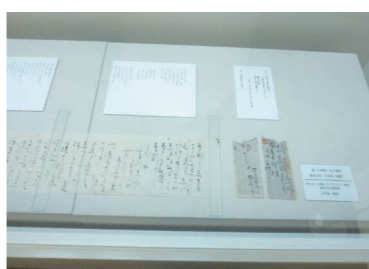
本展では、古澤家のご厚意により、与謝野晶子と寛が古澤幸吉に宛てた書簡をはじめ、晶子・寛自筆の歌掛軸や色紙などの資料をお借りして展示しました。また、満蒙旅行で撮影された写真や満鉄関係資料なども合わせて展示し、晶子がこの旅

与謝野晶子記念館内では、以下の記念事業も行いました。

特別資料展示「与謝野晶子と鳳家の人々」

平成30年5月23日(水)から6月18日(月)

本展では、晶子が堺時代に兄秀太郎の妻玉枝に宛てた書簡を、秀太郎のご遺族の御協力により初めて公開しました。



書簡には、晶子と兄夫婦をはじめとする母や妹といった家族との親しい交流の様子がうかがえます。与謝野晶子倶楽部会長の太田登氏のご協力を得て読み解いたところ、明治31年(1898)7月11日、晶子19歳の夏に

行で何を観て何を感じ、その体験が昭和期の活動にどのような影響を与えたかを明らかにしました。これまで、与謝野晶子と寛の満蒙旅行については、『満蒙遊記』の記述や詩歌でたどるしかありませんでした。しかしこのたび貴重な書簡を展示することで、特に昭和期の晶子の活動を知る重要な手掛かりとなり、ますます研究がさかんになることを期待しています。あらためて、多大なるご協力を賜りました古澤家の皆様にご心よりお礼申し上げます。(森下)

書かれたものと推定でき、今まで発見された書簡の中で最も古いものと思われます。当時の晶子が詠んだ未発表の歌も含まれていることから、多くの関心が寄せられました。

与謝野晶子の新しい動画を公開

与謝野晶子と寛の御令孫である与謝野馨氏が、ご生前に与謝野晶子記念館で活用してほしいとご寄贈いただきました晶子の動画のうち、福島県を旅するものを初公開しました。開館以来、孫を抱く晶子の日常の姿を観ていただきましたが、このたびの動画では晶子の旅での様子がわかります。晶子が玄関先から出てくる場面ではとてもにこやかな表情をしており、来館者の皆様もより晶子に親しみをもっていただけました。平成30年4月27日から常時公開しています。(森下)

与謝野晶子倶楽部との共同研究会

平成30年度は与謝野晶子生誕140年の記念すべき年であることから、堺市博物館と与謝野晶子倶楽部が連携して、晶子関連資料の調査研究を行う「共同研究会」を発足しました。具体的には、与謝野晶子倶楽部に在籍・関係する学識経験者と博物館学芸員が協働して、堺市博物館が所蔵する与謝野晶子関連資料の学術的な調査研究を進め、その成果を企画展に活かし図録などで発表しました。

与謝野晶子倶楽部からは、太田登氏(与謝野晶子倶楽部会長・天理大学名誉教授)をはじめ、田口道昭氏(与謝野晶子倶楽部運営委員・立命館大学教授)、中周子氏(大阪樟蔭女子大学教授)・加藤美奈子氏(就美短期大学准教授)・松浦あゆみ氏(京都女子大学非常勤講師)・山下奈津子氏(和歌山市立博物館学芸員)・川勝美佐子氏(元堺市博物館学芸員)・福澤敬子氏(元柿衝文庫学芸員)・足立匡敏氏(甲陽学院中学校・高等学校教諭)・



竹田芳則(堺市立北図書館館長代理・司書)にご参加いただきました。

昨年度末に準備会を開催し、本年度から本格的に共同研究会を行いました。第1回会議は6月15日で、共同調査研究の進め方、与謝野晶子生誕140年記

念企画展(秋)について議論いたしました。まず、進め方については、企画展を4章に分け、研究グループも4つに分けて、太田氏と森下が各グループに説明、意見交換いたしました。博物館学芸員は、当面資料の整理に専念し、来歴などを調査・リスト化を行いました。展示資料の絞り込みを行い、提出期限を設けました。資料1点につき200字前後の原稿を依頼しました。また、記念講演会は、山下氏と竹田館長代理にお願いいたしました。

第2回会議は8月31日に行い、与謝野晶子生誕140年記念企画展(秋)について話し合いました。企画展のチラシ完成の報告、企画展の展示構成の説明、図録の割付表と分担表を配布し、文字数や表記の統一などを確認しました。

第3回会議は、12月21日に行い、本年度の調査研究活動の総括と来年度の展望について話し合いました。また、企画展「与謝野晶子の満蒙旅行」の進捗報告や、来年度の晶子春の企画展の「新新訳源氏物語」完成80年記念展」の説明を行いました。

来年度秋の企画展が『新新訳源氏物語』刊行80年の記念の年であるため、本格的な研究部会を行いました。1月11日に、太田氏をはじめ担当の中氏と松浦氏が中心となって話し合いました。主に「源氏」研究活動の方向性について話し合い、まずは「桐壺巻」を集中的に調査研究することになりました。その成果を「報告書」という形で作成し、この機会にまとめることを目指しています。(森下)

平成30年度新収蔵資料の紹介

本年度は、総数12点の寄贈がありました。まず、与謝野百合子氏(晶子の御令孫)より美しい晶子自筆の、歌掛軸と歌短冊を4点、山田和子氏(晶子の御令孫)より木目込み雛人形とお雛様の晶子自筆歌掛軸や寛自筆資料など4点、鳳英里子氏(晶子の兄の鳳秀太郎の御曾孫)より晶子の兄・鳳秀太郎の肖像写真1点、山田紀子氏より新潟の風景を詠んだ晶子と寛合筆の歌掛軸1点「張福」より晶子の歌が織り込まれている大島紬を1点、平野美都子氏より晶子自筆歌短冊等貼交屏風1点をご寄贈いただきました。

特に、山田和子氏からご寄贈いただきました木目込み雛人形は、和子氏のお母様エレンヌ氏(晶子の五女)が和子氏の初節句に晶子から贈られた美しいものです。また、晶子自筆歌掛軸「白蘭の蕾のごとくあてやかに雛のはかまはふくらめるかな」(歌集『太陽と薔薇』収録歌)も合わせてご寄贈いただきましたので、お雛様の季節に合わせて公開させていただきたいと考えております。(森下)



共同研究・収集

特別陳列 千家十職―利晶で愛でる伝統の技と美―

関連講演会 & キッズプログラム



6/9(土) 筒井紘一氏講演会
「千家十職の成立」

講師に茶道研究家で、茶道資料館顧問の筒井紘一氏をお迎えしました。

「千家十職の成立」と題し、各職家と千利休並びに三千家とのかわりなどについて、それらに関連する歴史的人物や事項などとともに、現代の話なども交えながら大変わかりやすくお話しいただきました。また、茶の湯の歴史や茶道具にまつわる興味深いエピソードなども、ご紹介いただきました。会場には終始笑いが絶えず、筒井氏のユーモアあふれるお話により、80名もの参加者は引き込まれている様子でした。



6/23(土) 中村宗哲氏キッズプログラム
「うるしの茶道具づくり」

講師に、千家十職の塗師である13代 中村宗哲氏をお迎えし、小学生高学年を対象としたキッズプログラムを開催しました。プログラム前半では、中村家の歴史や千家十職の紹介に始まり、漆を使用して作られる茶道具の工程や中村家歴代の作品などを、スライドを使いわかりやすく説明し



ていただきました。後半では、参加者はなつめ(茶器)の製作工程の見本や道具類などを実際に手に取り、中村氏に積極的に質問をし、子どもたちが一つ一つの答えに目を輝かせて聴き入る情景は、大変印象的なものでした。

9/29(土) 生形貴重氏講演会
「近代の茶の再出発」

講師に、千里金蘭大学名誉教授で、表千家不審庵文庫運営委員の生形貴重氏をお迎えしました。



講師に、千里金蘭大学名誉教授で、表千家不審庵文庫運営委員の生形貴重氏をお迎えしました。



10/8(月祝) 伊住禮次朗氏講演会
「千家茶道の近現代史」

講師に、茶道資料館副館長で、今日庵文庫長の伊住禮次朗氏をお迎えしました。まずは茶の湯と茶道の違いのお話に始まり、千利休を祖とする三千家の成り立ちや、各千家の代名詞とされる茶室を紹介いただきました。このような千家茶道の基本情報をふまえ、近世から近代という激動の時代の流れの中で、変化していく茶の湯について、同時代に活躍された裏千家11代家元玄々斎ならびに12代家元又妙斎の諸活動を中心にお話しいただきました。

明治150年記念企画展 茶の湯の復興―幕末・明治の千家茶道を中心に―

関連講演会

企画展 与謝野晶子と女性歌人―「みだれ髪」から「チヨコレート語訳みだれ髪」まで―
展示解説



5月3日(木・祝)に、与謝野晶子倶楽部会長の太田登氏をお迎えし、展示解説を行いました。当企画展の監修をいただきました太田氏が、与謝野晶子の代表歌とその背景を合わせて詳しく説明いただきました。また、晶子とゆかりの深い山川登美子や茅野雅子をはじめ、明治・大正・昭和そして平成を代表する女性歌人について解説いただき、参加者からも近現代の女性歌人の流れがよくわかったという感想をいただきました。

書籍『与謝野寛・晶子の末娘が紡ぐ父母の想い出』の出版

与謝野寛と晶子の末娘である森藤子氏は、両親との回想を、数多く残されました。また、堺市における与謝野晶子顕彰

にも大きく貢献していただき、記念講演なども数多く担っていただきました。晶子生誕140年を記念して、森藤子氏のご長女浅野脩子氏と与謝野晶子倶楽部のご協力のもと、森藤子氏の言葉を紡いだ書籍を出版しました。現在、さかい利晶の杜のみで販売しております。

企画展 利晶に探る 与謝野晶子コレクション
記念講演会

11/11(日) 山下奈津子氏 講演会
竹田 芳則
「与謝野晶子と堺
～与謝野晶子コレクションを中心に～」

与謝野晶子倶楽部との共同研究会に参加していただいている山下奈津子氏(和歌山市立博物館学芸員)と竹田芳則(堺市立北図書館館長代理)のお二人にお話いただきました。

料にみる晶子の実家・駿河屋と題して、駿河屋の歴史や堺駿河屋の帳簿の解説によって明らかになった菓子についてお話しいただきました。なかでも、総本家駿河屋300年を祝した記念歌集に晶子の歌が掲載されていることには、受講者の方々も大変驚かれました。



竹田館長代理には、晶子と堺について、貴重な戦前の史料などの画像を織り込みながらお話しいただきました。また、晶子が堺時代を回想した「私の生ひ立ち」に沿って、堺の地図を紹介しながらご説明いただき、あらためて少女の頃の晶子が見ていた風景がよく分かりました。

企画展 与謝野晶子の満蒙旅行〜初公開書簡を中心に〜 記念講演会

「与謝野寛・晶子の満蒙旅行」平成31年3月21日(木・祝) 講師：田口道昭氏(立命館大学教授)

湊焼について

増田 達彦

はじめに

湊焼は江戸時代に堺で焼かれた焼物です。全国的には著名とは言えないものの、香合を収集したカナダ・モントリオール美術館のクレマンシー・コレクションにも湊焼の作品が含まれており、優品と認められる焼物も生産していました。焼物辞典等にも掲載されていますが、その概要はおおよそ



写真①



写真③

刻印もほとんどなく、それまでの「かわらけ」と呼ばれる土師質皿の系譜はひかないものの近郊の新たな窯で作られた製品だろうといふことが伺えます。また確認を得ることができませんが、西鶴が記した湊焼の石皿の候補としてあげたいと思います。



写真④

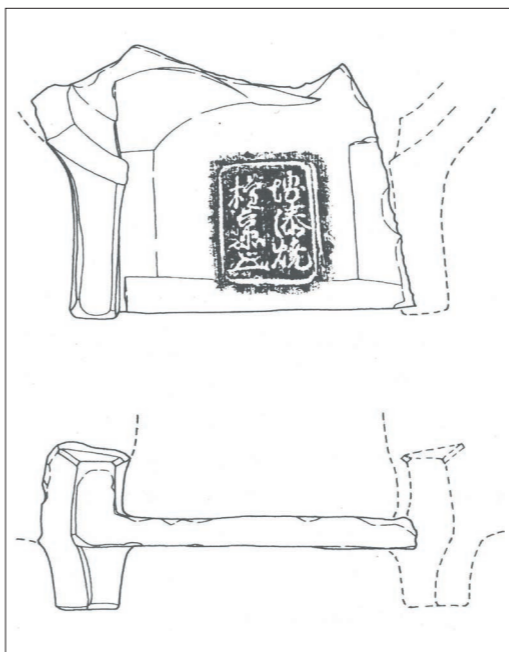
の作風の特徴は細工物にあります。海老型の向付は型物で、赤染風に仕上げ裏面には海藻の文様を型押ししています(写

◆吉右衛門と吉兵衛

湊焼の窯元の二つとして上田窯がありました。この窯は先に記した御室からきた工人が開いた窯を祖とするという窯で、文久元年(1861)に亡くなったとされる七代上田吉右衛門の作品が多く残っています。作品には「泉州堺本湊焼吉右衛門」という角印が押されているものがあり、吉右衛門の作品と判断しています。緑釉や黄釉といったいわゆる交趾釉などをきれいに使った手鉢(写真⑤)や土瓶・鉢子や、薄く透明釉を掛けた涼炉などが見受けられます。また、恐らく懐石で使ったような数皿もあり、いずれも端正で丁寧な作り方になっています。七代の息子であり明治三九年(1906)に亡くなった八代吉右衛門の作品も多く残っています。

この上田窯の親戚で長浜屋吉兵衛という陶工もいました。吉兵衛は1840年代から1870年頃まで作陶していたようで、角印では「泉劔堺本湊焼吉兵衛」あるいは「泉劔堺本湊焼」を用いて

も似たタイプを目にすることができます。発掘調査では、兵庫伊丹市の江戸時代酒造業で栄えた伊丹町遺跡第五三次調査で湊焼の素焼きの土風炉片が見つかっています。この土風炉には「堺湊焼権兵衛」の刻印があり、いっしょに出土した他の陶磁器等から一八世紀中頃の年代が与えられています(写真⑥)。この「堺湊焼権兵衛」の刻印は他では見つかりませんでした。文献資料では井原西鶴の『世間陶算用』元禄五年(1692)に「湊焼の石皿五枚」という記述がみられます。長屋に住む人たちが大晦日に生活道具を質屋に入れてお金を工面し無事正月を迎えるという話の中に出てくるのですが、普段着ている帯や升などを含めて合計二三品を質草にして一匁六分借りています。この一匁六分を現在のお金に換算するのは難しいことなのですが、当時比較的高額な給金であった大工の日当が2〜3匁だっ



写真②

真④)。一〇枚一組になっています。他にも写実的に作った鮑型の皿は細かく精巧に作っており、こうした細工を得意にしたのだと考えられます。正木美術館所蔵の酒呑狸々という置物も彼の作品です。

◆おわりに

湊焼の創始は恐らく日常器の甕や壺、火鉢や炮烙や皿などを生産していた中で、京都などからの技術が伝わったり陶工を招いたりして発展し、施釉陶器を生産し始めていったと考えられます。その中で技量の卓越した工人が現れ、当時の堺の富裕な人々からの求めにより茶器等を作ったと考えられます。しかしながら湊焼はその成立からどのような沿革があったのか、まだまだわかっていないことがたくさんあります。戦争の空襲により多くの資料が失われており、その解明は難しいことも多いようです。しかし、まだ知られていない作品が数多くあります。湊焼の実像を露わにするためには、後に昭和になって湊焼の廃窯が続く中新たに製作された復興湊焼の作品も含め、改めて一点一点の資料を丹念に追いつけていくことが必要だと考えています。

参考文献

- ・新屋隆夫『堺陶芸文化史』1985年 同朋舎出版
- ・川口宏海「伊丹町遺跡出土の湊焼」『藤井克己氏追悼論文集』同書刊行会 1997年
- ※石皿については、香雪美術館学芸課長 梶山博史氏より有益なご助言をいただきました。記して感謝いたします。